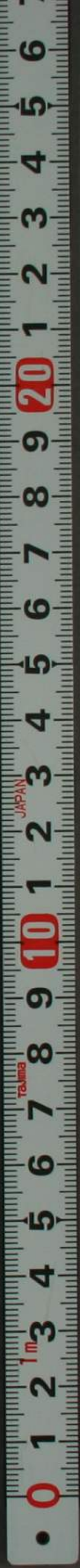


奉使日本紀行
四六

特別
ル 2
3138
2



門 2
 號 3138
 卷 2



奉使日本紀行

第四篇 シレトカタリナ 通函

我船後すや同ありサンタクリユス城より一丈ありて
 船より我等、急岸と加ふる相立船を二節將自身船
 より来りて我等より一且我等と総司の居所よりむ
 け地北総司ハトン。ヨーセステ。キユラドと名く其居所を
 ニユエストラ。センホラ。デル。デステロと名く、府より我船の
 敷きり好りして西南九里半と隔る如く示しお見す。

早稲田 大學 図書館
 冊 30.6.17
 藏 書

と後に己子甲は丹リシヤンスユイ及他乃船中此士として
総司の如き同一めり是の彼よりも親切に言ありて何事
をも我々と助んと仰しと予元此所は過留するを成り
久しからぬ振を先と欲し総司此居所まで我法事を弁せん
其速に船屋へへ」と思ひて之物も又彼より更を
命じて我船に來り我買入へき信所の目録を先く
府内并陸地を起き速に是を取むへ」と又我船の
薪の入用陸地を伐取むへ」と総司此云々通すも此地は

暑熱に我船吏等には業成るむといふれ為ふ事
は予の考より特に之を彼より乞取て之を買取りぬ
我等此測量に於てトメリ船の内にて之を採り」と
総司此許を以て是の我船の法計をテ子ハに取らぬ
後を妻居あるを以て測量して之を命且トナル。ホトキ
歐羅巴に神といふ南緯の天象を測給せんと欲せし
総司親切あり彼是れ目を速に希し我等大に信の
事ハ船中よりぬ但使信を從志とすも総司の許す

宿一福司之書此を便に借し夫も長くも予船に
返りてサンタクリエス城乃れ及て昭礮十二台告せしめ
彼もも晝礼ありは日城より長将及び一二の吏目我船
に奉食す予一司を陸に送り我船も舟を汲入且水桶故
修復する細場を借んと情ふ彼よりサンロキキエルといふ
処を長家一海一者難く狭き平地之水を一瀑布よを
桶と米播車も位無き水よを長家にて且是を
汲み^難おるは之の内も百ドン餘れ水を船も汲入る

ドクトル。ホル子ルを以日そ交ふ親象此處を建地^叔拍の徳靴
衆人勉強一斤斤放ふ予の思ふはハ十日許れ此の
出帆す」と欲す物も甲比舟サンヤスイ予も告て云子も
の中橋と表橋とを換しこれハ全く之故新仕船さ
まは有るはと係は此ハ橋板を賣也ありそ^匠
何れぬあるははるの志那屋あり且子も拍ハは
數月^匠通るす一物も時より速ハは交を出帆せん
するを也。抽るは先長高橋とありあるはは新

に徳国は事とせりて在る人を以て逐北林よき^ニ播種不
用也き大樹を採収せり。不幸小林中亦主樹を
不刈者も在りて海邊近引かす事まゝ容易なるは是も
徳国は助勢して徳事を調へては造作れぬに數日
五週平りを費し出帆を滞るせり。

右の事此の事も依て予の船中の居て他亦出るも或
は予は地の民衆の委なき振子と見せしむるを故す徳
地波布杜瓦爾人に對話するの益を失ふとも人の

是を取手邊に理斯彼亞より^ニ政令の何れもせよ主勤
と怠りもせよ理斯彼亞の寶庫よりは民衆を哀憐せ
しむとる波布杜瓦爾人は地方の民衆よりは利益は
多く有るに^更は編するに及ばずとはセントカタリナ傳及
は屬する陸地の於に伯西見全款に於ては僅なる所
ありし波布杜瓦爾人は亦存く發掘と設るを費少かり
は但は地氣候宜しく揚力を腹中して是を産する。亦其の
價ありと以ては亦用る而も價ありと見らる。

セントカトリックを陸地と二百尋許の海峡より別き世葵の
島より未丁の島は富島長^{海里}二十五里幅八九里或必にく
唯三四里と云世葵島の隅端を我測す南緯二十七度
十九分十秒ゲレーイクの西経四十七度四十分二十秒を以
て考ふは流ハフレール人初て是を記して星表にのす
其圖未だ後の著者何れも流ありものを詳く之を圖を比ぶに
少の差ありのいフレールに次てロルドアンリン人^名之而て彼
之を記載す少し千七百三十八年 元文三年 ^{ロイルデボウト名}

千七百八十五年天朝ヲペロセ人
共には流を總てし其より今もあて十八年を經られどもは流は
於て別に変化せしるも前と名ある處には地中管の
は石三ありて要害と云即ポシタゴツナ城^名ハセントカトリック島の
西側子立サクタのクリエス城をアトレイ流子立又一小塔砲九挺
を備るものデ。ラト子立流小立を砲九挺の内三挺のみ用ひ
あつりサクタリエス城には中々宮好と云我は知ふ後小銃
臺を設るけしハ洋中を遊をえつては城小銃臺とす
る事也モン子ロン^{人名ラ。ペロウセ}の書^管中記しるを實況と

是の予は小砲二十挺を計るゝてまゝ多くは換へんとせむ
 成兵終ふお十八あり是故小砲を繕ひせんといひり一人子
 七百七十七年^{延享四年}伊斯坦布尔人の如き大に兵を用ふを俟
 ひて容易小砲をくゝ但は金を買らば小接する
 陸地の一分を併せ有するも非れは乃難き事とす
 此とき兵量小砲を繕ふも止らばんニユエストロセシホ
 ラ。デル。デストロの府に貯けしるも皆備を欠りとらん小砲甚
 少に換ふことも其ハジキカ子打換し用ふまへまきあ せん子ロコ

紀伊海峡に小砲臺ありとすれども今ハ既小砲は其の成
 兵百餘とありて伯^{ブラス}見^ンより毎歲^{リス}理^ス斯^ボ你^ンに
 送るべき事重の割金石許多及二十億^{佐渡}ありエサトス^の名^名あれ
 ば成兵の需用銀の概^概數年來配賦する所といはれ
 其改令の趣きと思ひゆゑに成兵の飢を救ふべきは
 日一人毎にニナイス^{佐渡}即伊斯坦布尔貨^貨にアステル^七
 カレイス^七と一^七ニナイス^七の^七名^名即伊斯坦布尔貨^貨にアステル^七
 ヤステル^七といふニナイス^七の^七名^名即伊斯坦布尔貨^貨にアステル^七
 といふも是も其の給及重役の事より其を用

て貸借す。のちて理斯波亜より彼等の需用を給
する迄とゆふとへは成兵の隊將をケール人各名ある
ハスコ。テ。ガ。の。商。ゆ。て。は。屯。聚。ふ。て。名。流。は。て。子。七。百。十。五。年
テ。ロ。ウ。セ。グ。は。を。被。衣。一。は。彼。の。家。の。ド。ン。ア。ン。ト。ニ。テ。カ。マ。は。成。兵。よ
將。と。て。指。揮。せ。し。

は。此。の。府。に。僅。ふ。お。百。の。鄙。陋。の。家。有。て。二。三。千。の。波。尔。杜。瓦。尔
食。民。と。奴。隸。子。ケ。ル。は。是。ふ。住。居。総。目。の。友。と。兵。卒。の。舍
と。成。は。如。の。ま。一。此。指。築。と。せ。り。余。は。ま。一。寺。を。建。立。せ。る。の。企

あるをみる蓋カトリキ流を以て隷奴及其他要用の場を用て
よりちを建を貴らまれし或竹予板十時より船より上陸せし
黒人の男女衆を石を擡び運ぶを名て為さる。此は法を以て
衆徒の勲と爲さば是は衆徒よりかちを建るゆを教かるものなり
因て黒人亦の此の勲を以てし

総目トシヨセステキユドの支配は南緯三十二度西経五十四度ある
リテカラテ地より南緯三十三度三十分西経四十四度三十九分十
秒はキシト。パウル地の運ぶ場とを支配するなり

平出編目の祖の洋統説と云ふものと故が然るを察するに僅かあり
南一唯其海濱の地は其土人の其土人の意趣説して
推察し得る一其意趣の同らむに軍戦ありしに能く唯其土人
平和の時も互に礼射を以て其國之物を流布其土人の意と
多しあり

此も陸地の海も其土を肥腴にして多く奇喜砂糖を産出
リエ飲料の名 天童加の産の良あり及も此の土を其意趣と
運輸宜きハシントコロイスの産も若し其土は他方の船はに

物を買ふは只貨物を買ふのみ土人は其産物と歐邏巴人
貿易するに任したる土人今く物を賣の意あり此も由て文
易はるもの多し是を以て其土産物も只自己の用に
供するに非ず用外に其土人毎一年一度七八十の船を産物を
積りてリヲヤ子リヲ名に運りて其土産物及歐邏巴人の品と交易を
する是のりヲヤ子リヲ名に此地の土人の欲へりる品物を交易し
取らるるもの多し其意趣及砂糖の價は平らに過るる時十
コト量名三 半ピアステルより下へ程是を

多く買ふ所の其値も減るゆへに其は良材未だ
 予其質をの良之と爲す所十種餘を集めて但土人の此材
 木と他は勿論嚴禁を以て然る故に此港を云港と爲すと
 世に知ざる所の此の利益を収むる爲に此港を指揮する所の
 法製を設て交易の道を狭くせしむる事但度々笑ふ
 處きよ此材を此地より運ぶの産物と一及その他諸島
 貨物も運ぶ所より此材運ぶは是故に政選已の船も此の
 貨物を出してこそ其利益砂糖及びココを運ぶの所より此の

此港と其所屬の陸地の廣より四百トンの一艘の船は積りしを
 是より運ぶの程あり是土人の産物よりナ・ヤ子リラに運ぶ
 外に他は勿論を積りしを運ぶが^老重^微なる之石^松鹿^脂テール等
 此は甚しく土人已に所蓄を以て此を以て欲する陸地は少
 少に入るとサラス樹^コシ^トリ^シの^木板^を多^く樹を夥^く生^じ
 然るトナル^ニエ^スン^ベル^グを油^を採^りせんと欲して此は貨物
 ありたる所ゆへに能く我匠人を陸に導き我木を求む
 カンギエールより僅に二里許の地は大船の橋より人々樹をたよ

とあり子ラストワセシホラテルテステロの府は一實家の住居とも
明^義家中等の富貴もそそ皮作とては居居して商賈を
為す所も時めくまを不修して大贏利を成すの事も
此地の産物の生出も大に盛なりと云ふ因て^運救艘の
仕度と波も仕度も運輸をへき被^政政司もシントカタリナ
公港とあせ^政あせも常^人人交易と廣く成るるも許さ
公港とて^そそ交易と許さ^海海自ら相^争争肩を^ととあせ^らら
何^そそ也^船船を^獲獲^るるも^近近^海海^のの^友友^司司^はは^買買^上上^とと^ああ^れれ^是是^もも^船船^也也

仍も^そそ^時時^其其^益益^多多^かか^りり^一一^地地^はは^波波^本本^杜杜^瓦瓦^亦亦^のの^政政^令令^かか^りり^手手^狭狭^きき
仕方^もも^てて^ハハ^此此^地地^のの^租租^入入^はは^成成^率率^法法^司司^のの^高高^用用^はは^諸諸^事事^費費^用用^のの
ま^もも^取取^らら^るる^務務^らら^るる^所所^一一^是是^地地^方方^のの^窮窮^迫迫^最最^甚甚^{なり}なり^也也
かん^ホホ^ルル^岬岬^とと^海海^をを^或或^るる^船船^のの^此此^海海^濱濱^はは^乃乃^んん^とと^航航^るる^船船^也也
繁^密密^なな^港港^にに^ああ^りり^テテ^ヤヤ^子子^イイ^ロロ^をを^其其^探探^しし^高高^きき^もも^彼彼
所^もも^他他^方方^のの^客客^及及^買買^込込^のの^{もの}もの^とと^なな^るる^もも^多多^しし^とと^思思^はは^れれ^るる^也也^和和^親親^のの^取取
扱^とと^なな^るる^もも^多多^しし^るる^程程^也也^おお^つつ^てて^{ある}る^如如^しし^ココ^ウウ^及及^ババ^シシ^クク^スス^とと^其其
所^もも^其其^のの^説説^也也^とと^被被^出出^すす^はは^日日^々々^倭倭^船船^等等^もも^事事^々々^とと^なな^りり^てて

徳言の爲に怪して底付ら進らるありシント・カタリナはそ迄
吉了ギヤマン 金剛石坑あり進ら他邦のもの上陸せ禁せ其港宿
好にそ所を治るを便更しく新本を價と福を人乃
伐取に任る彼伐て船を運来ら子束をアスルと借きて足
と取其木の長廿三尺に修より候とら取船者等此
適豆面ある七週よりして何日仕健ありし初の日より日船者
徳人袖痛を敷せり數時を経て全く癒候事此の事あり
此方とら第一月の極暑も甚堪かりるをアモイナル船よりて

二十三日より三日の涼き海風吹て暑熱を和く穀葉の類ハ
豊を焼きて價値一々我亦半斤四百ポンドの量ありアスル
取一匹二百ポンドの量ありアスル 雞五羽を二ピアステルを買
香橙枸橈の類ありより多く熟を以て我亦數子顆を治り
西風南風を霧一但家お遠海舟の魚の之の多し此暑有
熱の時も漁り難きなるを御すこれの魚を未も焼きて
此を用ゆる船のカイスにて一本を刮て作り是其肉は長三十尺
幅三尺餘ありを僅に足らねし舟中挾之を過すはを疾し

然とも海軍少一は荒き討に當る船を悉く奪取する所
家此の爲に時此處に諸尼利亞のカベル軍船一艘を奪取す
角に拂部密船二艘を捉りて其拂部密船を歸還船にて
其船主の亞墨利加人を彼處に置り此地の孫目より其船を
事と爲しして其已の船を次は諸尼利亞人より奪取し之船は
亞墨利加人より所爲の軍に於て其船を奪取す其船は波布杜瓦
島の孫目より彼處を執人軍より拂部密の政友より引渡さる
事なり又諸尼利亞のカベル船を諸尼利亞國と伊斯把爾亞國の

軍船あるは伊斯把爾亞船一艘を奪取て此カトリナ港に連し
其船を其船を奪取し其船を砲十六挺を備へて
是を此地の船撃場のより奪取して其船の如くして此港に
其船を改め其船を波布杜瓦島の此港に其船
と此船將を捉りて其船の軍船と爲りて一軍船
砲十六挺を備へて仕出し彼カベルの船の甲比丹と名付せ
むは波は船主大に奪取す其船の如く孫目より伊斯
把爾亞船と拂部密船一艘を之と通して其カベル船と今一の

北緯察船を北緯の島に據るは砲士八挺備へる軍
船を北緯より南緯利車カペル船を取押へきある出せし
象等此地を以て略滅せし航海術及測量術の事暫ては
能くへし此港の内は船を合し是支あかりしをたはし
地圖は詳細にして言は遠くも委く画きしるはガル島と
アルレド島のガル島を北の方より甚く其島を削立せる山は
白く長き船ありと北緯より南緯に在りて若しは北緯
九里許の距は海の深さ二十里ありて深くと減るる若船と

北より此島を以て針路をガルトアルレド島の二島の間に取てアルレ
ド島の成幸の島三里許はあり小島の礁嶼サンペドロを有る見
る一丁束の百五里の方より西はサンタクリス城は向ふ此城の
北より南へも礁を御し軍一も交り又此城とサンペドロ
島の好水ある如く其にお通ふより便し其城はサンタクリス乃
南と北好く人針路をサンタクリスより南アルレド島と
セントカテナ島の間は甚く指し難くとは言ふる遠くは陸
を以ては四尋ありて是を以てアルレド島の深はあり軍と好く

アトレイ崎よりホル子ル干満を測りて次の考を予備し一之其
 考此交の潮を甚ふ順りて全く風を因て変とる満ち
 北より来り干の浦より起る常は海のみより風吹来北風の勁時ハ
 干の僅に知る程を其時二三時より辰刻迄の大漲と流
 程減退しそを中敷と取り早九分と流盈極は満干日と流の満
時敷といふあり
 の極まで三四時の百ハそ水より少くも増減あり漲之を減之
 時干の甚きハ一月廿七日の後一日北風の吹し時之満の甚
 きハ午の後に徐あり北風の時三尺と五分尺の二より南

風の時を満潮一時より始まる

ホル子ルを限儀を建て此交の極を夜を較日大極の吉度を例
 量りて其中敷を取て南緯二十七分二十分五分西緯是也
 ホル子ルと予の測の多くの月餘の中敷を四十八度〇〇〇と取アル
 ルド二八号の右船中ニ子リつハの概より推して西緯四十七度五分
 一分・アルル下の小船中ハ西緯四十八度五分五分五秒三三レグテン
 の船中ハ西緯四十八度五分三十五秒と取
 トナル・ホル子ルが四遊星鏡象限儀にて太陽及金星の赤道交を

教度^測過章一三八号の時半を日九秒の事と一八五号の時
半ハ五秒の候と云一三八号の時半ハ千八百令四年五月二十
五年に於てサンタクリエスの中教時より後より二時二十分三十八
秒五は日この遅行二十分易なる十八秒の加と云一二月三日の
言ハ既ハ二十秒の加と云千八百令三年五月二十七日テ子リハ
に於てハ僅ハ十秒の加と云九月三日ペンハタンに於てハ
八秒の加と云七月廿八日ベニスホルグに於てハ九秒の加と云
五月廿九日勃動を以て八秒の加と云あり

一八五号の時半ハ千八百令四年五月二十日サンダクリエスの中教
時より早きもの三時二十九分三十二秒五と云一其日この遅行の候き
其時ハ十四秒九四の候と云テ子リハに於て五月二十七日ハ七秒五
の候ペンハタンに於て五月廿九日ハ五秒五の候ベニスホルグ
に於て五月廿七日ハ七秒五一の候勃動を以て五月廿八日ハ二秒六
十の候と云

ペンシグトンの時計を以て一月二十日サンタクリエスの中教時より後
より事三時十分三十二秒五と云一其日この遅行ハ七分十一の候テ子リハ

に於て是十月二十七日五分三十の加コロンバに於て是九月
三日一分八二の減ヘニスルグに於て是七月八日五分二一の加竜動
に於て是四月零秋七十の加と云

西盤の測者子七百十二年^{正極}フレールヲ経路より十二度の北東
と云と云今ニ筆の羅盤の中數より七度五十分の北東

奉使日本紀行

第五篇 伯西見を出帆大洋より

千八百零四年^{文化}十一月二十一日子泊の表橋二十五日中橋出東
廿九日西泊の水先舟並力と竭て其^船具と造作して
日月三十一日甲比丹のジャンスイより去る云是二月二日に其
帆走きの支度調方を是に於て是二月一日子泊まで寫して碇を揚
彼測量具と泊を返ぬの小船を使者の如く送て彼を返へむ
使者の如くより此地の港目の如く返る一阿二日子泊を返る

孫目及孫目共の船は信の未だ其時三下の名も各の船
もて使節の礼ありし船より上の船を以孫目への答禮
せしむ

我等既子シトカタリナ流は運るへ一をへぬはホルン岬と名
時候甚風甚き時ありし一葉の船より一月は
其岬と名運るへと斗りし一船を運る月より一船を
運る一船を運る是れ船を運る途中一を延滞ありし
船一は是れコシタドにせしめて子口船より一はクニーンの海濱

ホルト・シントジエリとキリの濱はル・パライソと名お倉の未だ其時
今の山もいしと名運るへ一甲比舟リシヤスイに改免し
あるは彼と名とサニアン岬スターテシドの東隅は於て三の百我
船を待てるへ一あるは其の内はナゲスガ船の名をえぬ船を
コシエチランの港は向て船を運るへ一あるは十五日に待へ一ある
は船サニアン岬の一を運るへ一あるは彼は四月十日は既北
緯四十五度西経八十五度より運るへ一あるはナワラシグン流の月
ニカワ島のホルトアレナリフに十日の留我を待てる船は未だ其時

其四月十二日午後四時西緯半度夜のやまのりきり星は其
途中の船はさうあせしる船もコンセアチアの港に向て主要
用と爲す新水あを速に取入てまう赤子サトウイウ法嶋に向て
行る船はワシントンにあせ且ホルトアン古リアにうてエスタ
船の左右をすへきん

予はアンタリア港を而してサンタキリスチナ島のホル・マレ・デ・レナ
ス入らぬとあせ是よりエイテナント・ヘルズ下の尻尾あは彼港を
其嶋と西緯利加人のんあせり処より徳利を集め而して西緯利

加人も甲比舟インカラハともあせきりるを記さるあせりる北緯の事を
詳しあると要とす

其二月三日北風烈き船は帆を妨さる北風を潮の引をまへ
船を流しきりるを北緯の年あせりて船を都て北緯四時
流き西風吹て南船も帆を揚さる北緯の初まは北緯カカリ
ナ島の丑参りの隅をうけとアルト島の南は北緯をとう七時に
彼隅の船より南緯七十五度まへり星の正に彼隅にあせり測すは
南緯二十七度十九分十秒西経四十七度四十九分二十秒と記す

此地を以て離る標とせり

此船及び此舟も烈なる南風なる雨止りて亦亦東のまゝ東の地
方と離る此の船十二時より五十分にて底よりぬれぬ此舟
風辰已の舟は轉りて南東に船を西の方に向ひ地方の濱に泊り
たり此舟の舟長より天幸晴れて不ル米元舟の名北洋上も暴
風をへる舟は此舟
飛んで船の板の舟と
合て風をぬく
と既し船より飛去る時船を南緯二十八度
の舟は五十八時海を測りて五十分にて底を結別と名へ
予此舟と丙巳の舟は船をこの舟二月七日天幸晴朗ありて依て船

度月離の測量を以て此舟と午の測は平均より船のアル
ナクに流へる西緯四十二度三十分十五秒と一コニイサセ・テスラム
スに流へる西緯四十二度三十分三十分と流時斗より四十六度四十分
何れ年にも南緯三十二度三十分四十分と流時斗より四十六度四十分
零二分の北東と流る

此舟より予船中の水と人毎に量と定てある甲比舟の水は三百
一人を以て式「下」外量の名斗
桶あり 定て流物先船より舟より日本へは別り
多くの量とよふ彼日本人の甚ゆると流る合はれは是れ但

予の初めを借る此よりワシニグトシ嶋迄到りては四月と雖
海にありて是迄の水と然る船中第一の要務とされし之相
度船中侍の来りし日本人大に甚く感ふ和を言ふ振子と云
そ意味あるは此度大に恩徳を以て本國に歸りしもの
多きは少くも感ふ事多かりしなり予も歸りては其
夫和の多かりし悔る在りし彼の性質と名も只衣服と所持物
多にして清濁ありし事暴怒し易く是れ一人一人の容許
の男は其侍人と異にして彼等して本國に歸りしもの 兩國帝の



慈愛を感戴し予も振子にれり 餘念却て此男を惡く嫌ひ同
國の人ありしは此とお和を以て又我船の日本通詞方遂に和
使節に此通詞を親之何と云て彼等故に通詞に當り温ま
あやまあり
辰巳君の風漸く丑癸日午刻に汗流を全く南に向ふは日
時と雨降時と晴風も勁く南を走るの速にして是二月
九日午刻に緯三十七度三十分十六秒經度時斗は陰は西經
四十七度三十分と是れ期二時にリユイマナト・コロワワカ
カ

海水の風より騰起するをん。海水一線の如く丑癸の方と
あつちを引いて大の畦をえらうくんとしニシテカタリナをあげり
日十五里も南西に向て次々進んども南西の風も甚だおま
とほろおんと思ひし此^昼丑癸の方より東より十里も北より風の
ふあちをえかとうけ風の替り我も今丁度東より離る事二
百四十里許ありテ、テラ、プタラのちよまふんと此次日此風口を
全く通つて進んばそ風の力前日の如き一川一向して三十二里
即^北北東二十八度三十分此日より天幕晴朗にして我も逆風あり

緯三十七度の如き初アルバトロス及ストルムホルゲルの類の法を
見る緯四十四度の如き種々の海岸の流るるをん是れ土地の近
あふ微とる物をぬる物とをさるる百里も進んば羅盤
針の差漸く増し二月十七日船を緯四十四度十五分経五十四度
五十分の如き羅盤を通り各六回の差をある十五度十二分より
二十度四十分秒あり中板を四十七度三十分五十分の如き
差とる此^傾南のインキリナチイハの十度四十分あり此日船を中
四月船の測りありし如きして四回各五回の測りあり中板五十分

六度五十分二十五秒ホルズの緯度を五十七度零五分とし
時斗の五十六度四分を引ぬると二月十八日ある北風烈に
當り船は海に劇しく雷鳴し雲晴て船時の中は子午船と
又は利ぬると時斗の定座を船を晴調へ予定海合圖より
変を作て我按針位を子午船とせしむ此時海を測ると
八十五度半底を灰多砂の黒点あり甲は舟リシヤンスコイと同
く遠くより其家におく五十分あり此日の午をと太陽を
度と測るとよりホルズ天狼星と参宿の口より言度と測て

八時より緯度を四十八度零五分と経度を八前測りし方時斗の
教と船中の教とを此例し一十度三十分と終の月
離して二十度五十分を教す時斗ホルズ又参宿五と測て
時斗より経度を三十四度四分と取
ドナルホルズ此れ測量を勅ると大陽の影をさす時を船中
の星を測りし方船の定座の緯度の教と知るはホルズ岬
より其時酷くありしは彼よりセキタルと取て大陽の
雲より漏れおると胡ひ居るとより其定座より海難かんと

亦して是を休むも彼り言を勝るべく必難し
是より由り我此通船中お目て天體の實測を缺るべきを
ホムル動かざる事

是二月五日の午時許のち動風あり候子に船より今國をあらて
主船のマルセイユ 帆の取らう一歩目の の破きとるを知せらる候り
予我船を廻して彼と待て居る時子に船を帆を修理し
終る候も亦あり再ハ帆を揚し候羅盤も此時二十一度
四十分の北東在之船の緯も四十九度四十分経も六十五度十分

と候候して風あり向い船をハクランド嶺崎とバクエーラの
源の中より予を渡せし候と船を丙の方より南より清
起りて甚し船を押流し候り予候此風より申て是く帆を
揚て走らう此高濤も前日の暴風より申て船より能くバロメ
ーテルの候二十九ドム三五に降りしれを劇しき南風の東ん
と候り候も我も風甚強か候ありとセルヲ大濤に
至る時海面甚荒くんえり是二月廿三日天晴海靜に
して 船を北へ行程あり候に 候に候に十二度

と云テルモノテルを水面より千度より五千度水中まで
十分時を要して八度半と云海の水は七十五度之皆 餘
息を十能取ると云々船をかく波に船を波に通す程之
甲比舟リヤンスコイ我船に来ると云故予は亦くよく多財を
費して船をかく波に通す程之を波に通す程之を波に通す
を委く檢校し且云口をその土人よりよく羊物羊
豚の令存せよや言や識る間と云々
三月廿四日予我船の考し候ふスターテランダの東よりサ
ニ

ニ岬を去る程九千里ある云々ニ岬を去る程九千里ある云々
是を以て予よく帆を張て南東に走らせ大湯波を越え今
候の針路を定め量んと候事物より風弱にして予量り
を以て七時小諸帆を収め品マルセルを張て東より北
聖胡安のスターテランダの全境を三十五里より四十里の間に
至る程を渡南より南東より並行を定め東と西の向は
今候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候
やうに西より一箇の尖地頗北に向ふと云々其出づる程候候候

礁の如く此尖ハサン・デイユ岬と名付ル是ハロエルランドへテルラ、
デル・ヒテウエシの東隅を又レ・マイル海峡の入口なり此處に夥
しく礁をえり今朝日の前より嵐の士劇き其の
送る音を以て暮るる船中より火を焚く思へり是毎の水を
送る一徳風をレ・マイル海峡を通りて軍と名れり
予舟より航海者の多く難路せしレ・マイル海峡と初時烈風
り此の危きと名れをスライ・テランダと名付るを好むサン
タン岬と名の換を速に針改を西よりして後へべきを思

此風を海峡を通りて此の利を暴風の如く好
むる事と云ふ

十一時よりサンエアン岬より一ノ海を南より南へ中略湖より一ノ海
ありたりサンエアンの経度を初時斗の示すを以て随ひ測り此を
甲比丹・ヨーク及び其地航海者の路と比較し之を
ドクテル・ホルズル・シントカタリナに送るや其より西船の時斗の運行
を按りせしより由りサンエアン岬の経度を算するは

一二八その時斗より 二四二度四十分三十分

一八五六号

二千三度四十九分四十五秒

甲比丹コトク

二千三度四十七分〇〇

甲比丹ブリク

二千三度十八分〇〇

アツロウスミト マレスピナに属す 二千三度四十分〇〇

子の船時計

二千三度四十七分〇〇

甲比丹ブリクの数を甲比丹コトクとを強と半度を差くると
除てる餘をコトクマレスピナ及子船の時針の積数を甲比
五秒の五分は是れコトクの数を以て其の強とす

数を差くると其の強とす
強の強度を細考と要する
重と其の強とを精詳考す
航海者の為し利益と其の大
なるを知る

正午の緯度は此の我船のサンエアン岬を去るに
彼岬を去るに單なる高嶺のその西側なる陸地
東より延るに數里何と云ふニウヤールスエイレトを
去るに其の船中靜かなる風を以て船を去ると其の測量と船

道の第一より一の尾をえり是處幸は彼地を離るる遠
と見え甲比丹コークの後は此地は海に十二里を為るの三十二
里より近津の時は異な風を感ずるにニエヤールスエーランドの港に
入るに水もかくを感ずるにあらむ

此日甚晴朗行て丑亥の時の風之夕には立来るの風とあらむ
午の頃をサエ岬を過ぎて見えの夕に大陽の西に傾く
物をまきかきしむるに其時彼岬をえり此の岬の
削る岬あり四十分と強て今く見えの岬あり夕に岬を南

西に吹烈風は糸一をさし海上彼地を全く風の無きありと
望むるに是れは徳すやお友はる風阿多の徴あり一海
潮も北東に向く言く此岬及び望朝より言清か甚
の言く八時より九時迄星の言度を測り緯五十二度半
とふと此はをみ乃の算ははるれ十五里程北と見れ日
午の測り後北より二十七里東より十八里を是と見
我船のサエ岬を廻り付る強き北風より強南に向て走り
去り西に轉せり是は約八時算まるとはホルン岬より数分

南より来たる風は夜射改を西に取半時斗をこて未丁
間の大風起りおきて今く西風と勢が弱み只スセイルを
取てまきう路のアルト只名^名のゼースワリユウ名^名の及法程のストルムホー
ゲレン^名名^名を足り取入ても風暴く時疾風は霰雨を降
りり翌朝は至り風漸く静り船の帆敷を増るり清高く
風とお送して船の温湯蒸を甚しハロニーテルハ明る二十九
ドイムウ二十八ドイムウに降りあり今ハ二半は二イ升りぬれども天
氣軍一か^名とえへ多きとテルモノ^名テル三度^名降りも是ハ

スターラララ下の境まで今迄と地方の異なるを標するところありん
相レントカタリナすりスターララ下に近き所ありて波は
風北使直より来る速ありと物もスターララ下を廻りホ
ールン岬は近き頃より天高く幸よ曇りて南西の逆風
ありてふふ^名教^名中^名はホールン岬を以て天津の好地方は
出らぬと云ふと教^名を以て西風吹送てあるを重しめて
船の速あるを算測するは晴ありてはさうい
西午には晴ありて二時より疾風起り我も幸りして帆を

取收免ぬそ風まあり強く五時^時に^空夜曇り祝際五六
波のうき重なる白く柱のめく暴晴^時雲中子歌道^空言言
多き強^時りも又まき海^時り^空おストルムセル^帆の
外を皆取收免て暴風の備を行て待^空ふ^空散の暴風車
教分時の言に^空て^空静まり^空水も風の烈^空き^空りハ
止まり強^空劇^空く^空言^空清起^空。パローレル^空を初^空の^空旗^空の
時^空より^空二^空降^空され^空預^空免^空暴^空風^空の^空用^空意^空て^空船^空を^空船^空
き^空り^空世^空暴^空風^空を^空西^空と^空南^空西^空と^空時^空を^空吹^空朝^空より^空て^空少^空く

強^空く^空及^空て^空漸^空く^空強^空く^空なり^空大^空陽^空も^空強^空く^空なり^空海^空も
測^空量^空も^空多^空く^空なり^空緯^空度^空二十^空分^空経^空度^空四^空度^空〇^空〇^空と^空は
夕^空より^空又^空強^空風^空吹^空来^空り^空八^空時^空に^空又^空南^空西^空の^空烈^空風^空吹^空て^空其^空劇^空き
前^空より^空至^空て^空と^空は^空 . . . の^空内^空より^空卒^空して^空是^空を^空免^空き
は^空と^空之^空此^空より^空由^空て^空清^空益^空多^空く^空船^空より^空及^空て^空も^空風^空強^空劇^空く^空時^空
烈^空風^空散^空を^空吹^空送^空り^空ぬ^空此^空暴^空風^空の^空言^空を^空只^空中^空の^空内^空より^空は
船^空の^空内^空より^空強^空く^空なり^空此^空より^空して^空他^空法^空を^空免^空き^空夜^空
至^空て^空風^空は^空強^空く^空なり^空次^空の^空日^空を^空風^空も^空強^空く^空

第三日 晴好のときと信るルモヤニル船板よりしてハ
極寒を度と降る雲を度の一つ一棚頂よりハ十箇のち之度
上の温れ一昨日より昨夜皆船板よりして晴光を温暖
せし衣服帆板を多く太陽は乾くより如く天をきき
惟しまてハ船の薄氷は場へ付る常ハ船先の居下
多ク大燄を多く降し先又船先の書あり一人
象一と書あり彼の衣を多く焚く乾きしむおれ
おれしと書あり此暴風の舟ハ船の前のすは漏れを
見

あり船を縄をとりし先て是を捨て最良乃
板に漏れ穴を多くし船を延く是を塞ぐむ又
スターランラントを多くし船を延く是を塞ぐむ
信は三日三夜ハ船の経緯を測りしよりハ昨日是を測
りし我船暴風の冒に北より二十五里東より二十里吹送
りし昨日ハサンア岬の西より一分のをも多く物も北風強く
吹送る船の形は適くしとあり今迄船中一人も
病者あり者ありと書あり此冒中の悪き天を一日も雨あり

事あるに地方その危き痛の程を萬生をきき事と
を怖まはしむるを月にして

羅盤を船の南緯五十八度五十九分西経六十三度四十七分
を一時の半の二十は度三十分の北東は七十三度十五分の
南傾と云

北風益吹き船は又て船の走る或十二イブまで直して西へ走
りて朝は八時の筈にホルン岬を既しき過りて大洋にお
よそと云ふ

奉使日本紀行

第六篇 ^{ホルン} 岬の位置よりニカイワにある

シントカタリナをわけてより四週の後三月三日朝八時は角岬
を去りて一小時の空速あるは是より風名表して北東と
なり甚烈き船は是より較日吹續き且空を雲深し一時の
中は海面より船を見えざるあり清く南より雲ひ
おて船を揺るす三月五日は日ある昼は太陽高く照り下り
トルホル子ル之を測りて緯五十九度五十八分と云ふ海道の筈は

従つて千度零九分と此度より西風より由て測る所の
極之時より極の緯より此太陽の度より算して七十度十五分の
如く三月七日午正太陽を測りて其測りて再考せしむ
上下の暴風より日十二里より十五里を南に吹送らるるを以て三月
月九日海上全く静にして我亦 海水の度を測りて百尋
の深より一層半の深の處に度半水面上より二度零二分此時
を以て極の緯と爲し又法天頂角數を平均して極の緯の處を
測りて千七度零五分の北赤緯と爲し是より極の南緯を算し

此の最大の處より船の緯を五十九度二分を測りて
千七度零五分と在

三月十日午正算より一層半の深より西半度より船
の針路を取ると岬より北東の南緯より算して極の
緯より西より東の處を以て極の緯より算して西風より
我を意を以て極の緯より算して西風より算して極の緯より
取極き初め今北緯の處より船を算して是より極の緯より
十度より算し北より算し北より算し北より算し北より算し

予は示せし如く既に七十七度あるも程に千九百と多し
遂に北緯上りて走りぬるなり

三月十日日我船南緯五十六度十二分西経千二百五十五分
より赤道算する経度八十六度二十七分と西にラン岬より西八度
と及此岬をテララゲルと云ウゴの西邊岬之岬岬を多しとすはを
天幕疑なく要可くすと案ずると若風を始りて千クの第
一回と天二回の針波の北西の針波を取厚くと思ふ事又兼て
は多々南風を始りと思ひしは北風新し十百北風

強くあり逆流強く船を流揺るる暴風の時は甚し
バローナルの北甚く強く強て十七日の夜は二十八日と
とある予全航海中今年三月十日の夜は此程の如く低
きありししく小西より来る高緯甚く大にして其方角より
偏り雲霧亦西乃大暴風の来るときは船の備を前して
船は十日の好天を以て全く風ありしと云ふ程の時
際多し、此程の多きは予は陸地を以ては船を以て
未だ此程の未だ予は陸地の元より船を以ては船を以ては

四十五分西経八十九度。・。・。左舷側にて平均一四種盤計を以て
十九度五十分二十秒中東経七十五度三十分の南傾と爲
第三月十一日朝八時航海は信守院よりラン海峡を穿過し約
何者ニクナリ岬の海峡の西隅にては岬の船の東
距離六百海里に在りて是れは是れは航海のスターティング
及元ヲ元ヒコトゴと二十四日の月には是れは是れは是れは
航海は是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは

六リニイフ、此の来る前より低くありしは此れより再び初りし
我々の船の針路は是れを以てハロリスカルランドにボウガイニヒ
トココク及其地を以て航海者の針路は是れを以て是れを以て
此れは航海者ココクの初回の途を以て是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
南風を以て是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
バローテルの言ニドイムニリニイ我々途中は稀なるは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは

風は正午の風とあり候きこもり申す且湯沸く子ワ
船を元先^紅の船中暗く風荒く申す合國の石火矢を
鳴らす何の意あり申す子ワ船とあり申すともあり申す
多し申すを登彼とあり申すとあり申すとニカイワ崎
あり申すおぼくは五子とあり申すと推^紅せし此時家船の緯
度七度五分西經九十七度の四十分^{時平に}
三月廿四日同日二十一日より船が天幕荒て言候起
て船を湯沸かす事あり^紅お常事は一週は二回も船の

水を汲干候して申すとも今も毎船のあをわきむは
板道の月夜を測らるる事三月二十日に月を測る
事とあり此と四行にして十二の距を測る事申す
平均して緯度船のアルマクに於て九十九度二十分ユイ
サセ・テス・ラムスに於て九十九度二十五分十五秒トホル子
の測を九十九度二十分ユイアルマク下の時平は九十九度五十分
五分十五秒とあり三月廿四日又月夜の測をあり此事三月
二十日とあり月夜の測時平は三十分二十分十五秒三分八

二十七分十五秒を走ると及第なる平均速度は西と
 とは多少なりし時の平均速度より若干なりと推し
 是初に暖地より初に寒地より漸く温地より
 入るとは多少なりし時の平均速度より若干なりと推し
 測るべき速度を捨て初より速き平均速度を時
 分の平均速度を推へしは法例量の平均速度は十度平
 九分二十秒より八度五十七分半に及ぶと推し
 九度三十分より十人秒より速きと推し船を其時南緯三十八度

○二分と云

四月八日船の人前を問ふに予船中の内は皆血病の
 候ありしもの有りしと云はれしは是既に十週の間海より左に且
 陸の六週を以て西温の地より左にドクセルニスベルグ
 衆船先を診るに皆コレラに在りし時より強健す
 遠断のより固くメリ多しを以て予も血病の患外に終に
 かく船に病者の一人も有りしを以て予も強健す
 但使節の危人を治すを以て予も強健す

本國に帰ると欲するも此如くは帰る手當を解旅と
し不し彼帰國を欲するは是を帰るも及まじ然る
此も一人を此旅を終る迄存立を願ふと云ふは是れ
目下増え幸温暖と判られハ予此等船中おハポトルを飲
茶一を代として砂糖と酢と刻後一食時を茶と与へ飲
しむ

又四月十日とシントカタリナとありし初この能天幸すしては
よりハと幸も家子好晴ありしと云ふ船斗の事候は

諸仕業を初め初しむとユカイワに志す。是を為し
終しむ帆工は旧帆を修復せし見言さ緯度の地よりある
暴風多の時の備とあり又船法は新し船の器具を修復
且ハ刀斧を作りしめ諸人の交るの用に供す舟匠を走航
小舟を修復せしむ砲筒をハカキ本位は列並しガラーポトル
ストイをとりて船長の事と領して積右の爲に是を射撃しむ
又四月十日敷時の内暴風吹れ三時多し南風と成り敷時の
内強き吹風未のちより吹ぬ終り南東風と判り船の帆を

不測強て至奈の百子走り先より針路を西に向へむ西風の
吹時子船を強度九十九度迄吹返ると先より南東のバサート
風を吹く迄は好風ありし此バサート風の時に先より那由
ガサツカに於て彼前より亞墨利加商船の品物を積入りて
先より使節を日中へ送る事と爲て那由先斗る度
あれも今年の同上使節の日中より那由船向迄と前路の海
事ハ能き事一何志使節を日中へ送るは六月を経
る一船をカムサツカに返る事五月の末に在る事ハ好

て去る迄の何事此日中より那由先斗る事ハ好
也よ却くハ要と爲る事六月七月八月の百子は程々
大洋中と強度搜索も亦事ハ勤の一と云ふ事今より日中
より九月十月も那由先斗る事ハ好也船前ハ大東府船をへ
且船の火酒桶ハ強度一ハ好也船前ハ大東府船をへ
又日中より那由先斗る事ハ好也亞墨利加商船は備ふ事ハ好也
那由先斗る事ハ好也又使節の金も亦ハ好也日中より那由先斗る事
ハ好也今先カムサツカに返る事ハ好也彼前より那由先斗る事ハ好也

商館の手代亦い船を積むる荷物積纏索を渡し
使節も旁り西墨利加商館の船艀とあるの勅問も先比
標的を先い置りしとある也

是より於て予ハセン船をあるを止し且此船を今ある西
五百里許をも隔て離れし此二日以來風を巽或ハ辰巳なる
辰ノハサト風^北とありしと思われし風又辰或ハ丑癸なる向て
吹り予升帆を棄ててワリス^北ホウカインヒの針路に
をき^北向ふ且船先い航して不意を楯に升り帆に既

構よめて陸地を見せしむ但吾等十ヒアスル夜ハ二十ヒアスル
を勅せんやい多しものい貴と云ふと約を五月十七日經百零
四度三十分乃至南緯の廻り線を渡りぬ

五月十八日及十九日を晴好にして五月月離を測り五月
十八日を午百零六度五十分二十一秒十九日を百零八度四分十二
秒を平均數と爲百三十八号アルルル時計ハ十八日を百零七度二十
分五十二秒十九日を百零八度二十九分十五秒と爲是を平均數と
爲二八号時計を二十七分四十分を爲しと爲月離數也

十八日緯二十二度二十分五度四十九分の北東五十二日緯二十度
 五十八分経百零八度四十六分五度十二分の北西羅盤の北
 針ドゥイク諸嶋を南へ向く二度五度半の北の東北の北
 ありし

五月廿二日緯二十度〇〇北東と北東と南東とを以
 習り吹く疾風は急なるを辰巳のバツカート風を或は
 強く或は弱くする事は何れも晴好のワツシグリン嶋に
 至る習りおしく吹く候事を録増てテルモノーテル
 棚頭
 カヨヒト

以て二十二度より升り ^{カニバン} 帆板上の陰を以て度より天
 幕跡で好晴ある事より後て月曜を満量一ワツシグリン
 ン及ソンドサ嶋の経度を測る小儀よりコークグソンドサの経
 度の測及マルカントセイロソンのフツシグリンの経度の測の事
 を披き且此よりホルグの表を以て算り此等の測量の平均を
 百二十八号の時斗の一度三千秒の西より取り換りネドサ及ワツ
 シグリン嶋に於て五月六日七日の時斗の経度算数を
 此等算数をもも星ありし

予針路をへつユギエ嶋ココロのホードとユウエガ嶋ヘルケストのの間
より取て此二嶋をへんとは五月五日北航に甚兩疾風
を不晴に少くも風重きとも月離を測るも
能くは五月五日北航を南緯九度二十分西経時平
月離の例を以て百三十七度零八分とは次航を帆を減
てハッサート風を走つ曉に於てへつユギエ嶋を南西五十度の
方船より去る事三十五里より三十八里の百三十九里此嶋諸
国大なる其頂平にして其北と南は少くなく較るも小

隅分りありねども二嶺ありて星と見ゆ甲比丹ココロ乃
國に存此嶋の南側は数小礁嶋を記すとて其北にあり
能くは北緯五度西側と西側は或は高く丸く或は極の形
の如くある小礁島ありて大抵本島と距る二百五十尋
或は三百尋許と云ふコゴウ針路は九度二十分より北航は
嶋を去る船の庚申より見ゆ此北西側は五礁を去る時
七時半に我等又ライワア島メシダシナウドミニキと名く見ゆ
其北に五礁を去る時メタ子嶋島メシダシナウドミニキと名く見ゆ

そのくと思ふは島の東端を我船の方位は南西

その中一、東南西七十五度三十分と云ふコークの証を此島を
伴はぬ船が家より三十五里許の距離を測りて是れを詳しき事
能く其の計より此島の南端の南にありホムル及ヨ
エニステルン船は大陽の度を測りて時計の正を
換へて此島の南緯三十八度三十分三十分と云ふ此島の西
端の南緯三十分と云ふ事能く其の計より八時船が正なりと云ふ
ニアロエカ島の南緯三十分と云ふ事能く其の計より南緯三十分と云ふ事能く其の計より

あがんとる事十時は此島の正の方より三十分船の南緯
三十分と云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より
九十分三十分と云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より
三十分と云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より
三十分と云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より
復て我船の南緯三十分の距離より三十分の南緯三十分と云ふ事能く其の計より
子ルとロウエニステルンの二人トロウノトとラムステンのセキスタン
テンに云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より三十分と云ふ事能く其の計より

復島の釋名此島の北は子寄より南の方よりして
在るは向へつエギエ島を己午には島嶼の南東へ成り見
まじりし今此島は人のあつぬる島を此島は沿く六
七里を距り多し海の深は約百尋にして底は堅く是
此島を東より西向して行くも中央を最長く其西側は
峻峰あり其西より行く是と云ふ形復島のより
是より此島の東端島嶼の成は是より一時に復島と見
しは清く中央の島嶼の如く其西側は一極の如き

その言く海岸へるは南側より湾曲あり復島の東と
知て是より復島の海岸を頼み難く是れ此島の西側の
記述の地と云ふも如何に其地と云ふは東側より西側は
一並の岸を有るは島の危礁の上を在て是より深き溪を挾
み是より岸を有るは島はスターテラントより似て只彼より荒
島は根子之又は西側は一極島一里半許あり田ありは礁
島と西側の島嶼の間は平水の大石基石の如きを是島の西
側の漸くと低く転て去り言く海岸へるは島の危礁あり
張

此礁は西に好港をなせりと見ゆれども此は是を審み
て見る能くは此礁を僅の離りて多き此礁も凡も
流りしは流りありあはしは任人何れをんは
変りしは烟の升りて見ゆ此礁の東隅の象船の如く南時
北子大陽高度を測りて時刻を定め而して時午の義
に従て是を推し経度百三十九度五分〇〇と此島の方角
甲寅間と庚申間にして長五里ありリイテナント、ヘルゲスト
と星士コークの図を有る所随分詳しと見ゆ但し南側の形ハ

圖と符合せし図を有る所西側より北よりコアセエガの
中央の象船は南緯八度五分三十分西経百三十
九度。九十三分とヘルゲストの例は南緯八度五分三十
分西経百三十九度。九分〇〇とあり是を推しニカイフ島を考
みしは是れと其距離を測りては約五百里ありしかば
セイル而已を除て該船を収てニアフエかとニカイフの間二十
七里の幅ありしは船を考み是れヘルゲストの間よりニアフエ
との間を詳ありしは其間を針路を収て其距離の

中子島を以て名付し居たりは一時を以て船の基を陸に
をきき見えて又南子島を以て名付し居るはユアフエガの西側とニエ
カイワの南東隅マルチン岬の北緯十八度ありと云ふ船も
ヘルゲストハ二十里ありウイリシハ二十四里と云ふ船は由て
アウロウズミトクルゲストの北緯船の経緯の測及ワラシク
トシ船の才地の説は誤るべきもの不申を知るは彼ハコークの
也故亦其を以て且星子名何ものなるヘルゲストの
測ハ極其詳悉と云ふれども船もクルカント及ウイリソン
より

船もよりユアフエガ島の側をヘルゲストに及ぶもの船マル
カントハ今も是を以てウイリシハは信を以て云ふもの
初め此島を以て多島のハ西聖利加人ニコラハム及
其上の事を知る事予に其説を以てし
其五度ニユカイワ島の南東隅に向て船を以て船の北西十
五度の北緯一星を以て此島はユアフエガ島の南西二十四里
はるし居るもの船も其島を以て云ふもの船の南西二十四里
はるし居るもの船も其島を以て云ふもの船の南西二十四里
はるし居るもの船も其島を以て云ふもの船の南西二十四里

のコムプロトル湾と名くその之予世をよりリユイラナン
ト・ゴロウユフと按針没入して二艘の船舟を安て
チン岬とコムプロトル湾の西隅の深さを測りむルチン岬ハ
寛窄出、地形あるより著しく又コムプロトル湾ハ
マルナン岬の西半里は深多の大礁何ぞ此標と此湾を
随分風を防ぐに宜しとるも此岬も舟より舟の深多は未だ
ある所一蓋傳令船一舟も此岬と此湾と此礁と
此岬と此湾と此礁と此岬と此湾と此礁と此岬と此湾と此礁と

二里にして程海の深く底は砂なり又此湾の深く程
にして底は砂なり又此湾の深く程にして底は砂なり又此湾の
三十五里あり程舟を安て後船を満ちて先
一里の距離ありと云ふは此岬の深く程にして底は砂なり又此湾の
と名く港をえおきた此岬を今く此岬と名く此岬の
方子連り山嶺を善い巖礁先元にして只此岬の深く程にして
千尺深ありと云ふは此岬の深く程にして底は砂なり又此湾の
ある石造の家あり此岬の深く程にして底は砂なり又此湾の

困るる事此を墓所の教へしと案しぬ未だ予タイヨ
ホアー名を尋て多く墓をたれども此教の物をたれば
由て思へ彼家の如きは名の教と名白物も予海子足
洋にまゝありし海濱を渡り時確し人多く
集り函箱をたるといへくそまはつた事ありしあり
土船一艘の少将は商人八人を乗て函箱を漕ぎ何れ
小船は白き旗を立てる所等おもふは白き旗を欧邏巴人の
和睦を表す記号とされ彼船も欧邏巴人の在ける

あると案して其船一人の信危利亜人なり其形状は商人の
如く思ふ事とす唯腰はゴルテル^{帝の}と纏まると其は
者共より信危利亜人二人を伴ひ函箱をたれども
為し薪水の用と^辨箱せんと信ひ且目も函箱の用と案す
是しとて其後等と案ししるし此船の事を探知する
為の好通する事と信ひぬ
信危利亜人を口べつと名づく者も彼の信子已む七年
以前より此船は信危利亜人をサタナリスナに居る事

二年ノ元信尾利亞船ヲ勅めしむる其船先出甲比丹
遠省一已と味^方引入んとせしを拒み船先等の為子
信上ノ故されぬ之船先を以てニエカイワ信主の親屬と姻
也結ひ島中王を責むる故に亞亦^方為し月とを在るると
容易ありと彼又云を以て信尾利亞商船より道を通拂良
察人ありて此信上を奪ひ信一已と其お惡むる事飲の思ひを
あらはし申せば拂良察人を信上及び土人ノ誣へ信
して彼を罪せしめんと欲せしめ其已とお惡むる事

述ゆる事能て亞亦^方下^方彼亦其^方改選巴^方を以てかゝる
船先の地租移其信の土人ノ文り信上を君稱し改選
巴人をえ其互子^方の難き文りし^方お就睦^方其^方理あるに
及^方互子^方お惡む他^方信^方を^方哀^方むへ^方ま^方と^方ある^方也^方是^方を^方以^方て
亞亦^方實^方下^方遠^方留^方中^方轉^方て^方此^方土^方人^方の^方和^方睦^方を^方取^方捨^方少^方へ^方き^方
理^方害^方を^方述^方此^方土^方人^方互^方子^方お^方就^方睦^方也^方は^方土^方人^方也^方信^方以^方て^方汝^方也^方
其^方亦^方亦^方其^方事^方あり^方と^方勸^方勉^方せ^方れ^方也^方此^方土^方人^方も^方先^方お^方和^方睦^方也^方其^方事^方
叙^方して^方亞^方亦^方の^方為^方して^方互^方子^方を^方と^方り^方和^方睦^方の^方理^方を^方あ^方せ^方り^方也^方

此諸厄利西人側子拂郎客人の所を交りて又其子告て云
くろき今わし和睦まをも彼拂郎客に於てを答はれ
ゆり、能く守て和睦の情を致さる所を乞ふ之は彼
立らるるの事とす、云は衆を平に制りあはるるハ易か。
唐一物も拂郎客へ乞て心より和睦を為さし
むらもを和からんをさあつと

四年より船をポルーアンナマリア港の十六尋あるを、
破る底を細砂とす、あり島の北濱よりハ半里東濱より

只千里の所よりミエトマ^{十倍}の名ハ此港口の西側に於て
船の南西三十度はあり港口の東側と云るマタラ倍ハ
東南より北西と云るを波を又の小川を我より北西十
一度は在ると

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is faint and difficult to decipher, but appears to be organized into several lines or paragraphs. The script is characteristic of early modern European handwriting.

